

## 第3回三木市小中一貫教育推進協議会 議事録（要旨）

日 時： 令和4年8月25日(木) 午後5時30分～午後6時30分

場 所： 市役所5階 大会議室

出席者：

構 成 員	山下 晃一	神戸大学大学院	教授
	安藤 福光	兵庫教育大学大学院	准教授
	密 祐浩	三木市区長協議会連合会	
	井上 澄子	三木市区長協議会連合会	
	吉川 敬二	三木市連合PTA	
	小紫 達矢	三木小学校	校長
	長谷川 珠里	吉川小学校	校長
	藤井 克成	吉川中学校	校長
	坂田 直裕	別所中学校	校長

事務局 本岡忠明教育総務部長、横田浩一教育振興部長、  
荒田知宏教育施設課長、鍋島健一学校再編室長、  
武内克朗学校再編室副室長、河賀健太郎学校再編室主査

### 1 開会

委員長あいさつ

(委員長)

東条学園の視察に引き続き、第3回小中一貫教育推進協議会を開催する。私もこの度、皆様と施設一体型の小中一貫校を体感し、いろいろな事を感じてきた。今回は、鉄は熱いうちに打てという言葉もあり、視察を終えて皆様の感想を伺い、意見交流を図りたい。9年間つながる学び・施設設備の2点について、できるだけたくさんのご意見をお願いします。

三木市においてどのような施設一体型の小中一貫校を考えていくのかも含めて考えていくとすれば、どういう方向性があるのかという視点で議論していきたいと考える。

### 2 議事

(1) 視察を終えての感想

(委員)

図書室には司書の方がおり、ディスプレイも工夫され、おしゃれな本屋さんようだった。

空調完備、24時間換気、採光にも考慮されていた。

保健室も広々とし、シャワー等の設備も整っており、大きな病院のような感じがした。自分が生徒だったら用事がなくても行きたくなる。

(委員長)

隅々まで、細かい配慮がされていた。

特に図書室は、温かな雰囲気があり、子ども達の学ぶ気持ちが高まるであろうし、疲れた時には本に親しんでみようという気持ちになるであろう。学校図書館についての考え方も変化し、進歩していることが反映されていた。

(委員)

現状、図書室が位置的に行きにくい場所に設置されている学校もあり、子ども達が休み時間に図書室に行ってみようと思いきい環境のように思う。しかし、東条学園は、行ってみようと思わせる環境だったように思う。

各フロアには、子ども達が集まることができるスペース、相談室、倉庫があり、環境が整えられていた。

教材室並びに簡単な打合せができるスペースが各フロアにあるのは合理的で機能的であった。何より、職員室が1つで小中の先生が交流できるのが良い。

子どものいる時にまた訪問してみたい。オープンスクール時等、教職員やPTA役員で訪問できれば、さらに施設一体型の小中一貫校への理解を得られることにつながると思う。

(委員)

トイレ配置、階段の色、体育館の配置、小・中学生がともにいるからこそその設備や工夫であった。

口の字型の校舎は行き止まりがなく、どこかにたどり着き、誰かに出会い、声を掛け合える環境であった。

4-3-2制をはじめ、小中一貫教育に取り組むためには、保護者、教員の意識を変えることが大きなポイントとなるであろう。

(委員長)

口の字型の中に、ゆったり過ごせるスペースがあり、非常によく考えられていた。小中一貫の考え方と同期している。

6年生という存在があるから、最高学年6年生がリーダーとして活躍しているが、工夫次第で、4年生がリーダーとしても活躍する場面を十分つくり出せることが分かった。

(委員)

加東市教育委員会の挨拶の中に出てきた「想像以上」と答えた子どもの声以上に、細やかな工夫がされていた。

子ども達が学習活動をするための工夫もされていたが、地域の方が集える場所も設けられており、地域にも配慮されていた。

クラスだけではなく、学年で集える場所があった。体育館も大小2つあり、十分すぎるほどの施設で、うらやましい。

大きなお金がかかったと聞いているが、三木市が施設一体型の施設を建設するとして三木市にはハードルが高いのだろうか。どういう予算で、規模はどうしていくのだろうか。

4-3-2制の意図を聞いたが、いろいろな仕掛けをされていた。1年生から9年生まで揃うことに不安のあった保護者も、開校してみると不安の声はあまり上がってきていないようだ。子ども達も楽しく通うことができているそうだ。

学校でどれだけの準備をされてきたのだろう。三木市も取組を進めていく際には、十分な準備期間をかけて進めていくことが大切であると改めて感じた。

(委員)

うらやましい施設であった。学校現場の今のニーズに合った24時間換気、ウイルス対策としてのオゾン発生器、プロジェクター、タブレット収納スペース等の設備面の工夫があった。

施設だけなら小学校・中学校を分離して建設しても実現できそうだが、施設一体型のメリットは小・中学校の職員間の共通理解のために、職員室が1つであることであった。予算のこともあるが、小中一貫教育を最も効果的に行える施設一体型の学校に、是非、舵を切っていただきたい。

(委員)

設備が整っていた。子ども同士がぶつからないように、廊下はゆったりとした広さがあり、細かく設計がされていて、よく配慮されていた。

少し心配なのが、何もかもが完璧に整っているので、考えなくても自動的に使うことができ、その事で子どもの思考力や個性をなくすのではないだろうか。しかし、本当うらやましい。三木も頑張ってもらいたい。

(委員)

素晴らしい施設だと感じた。学校の建設に至るまでの準備がしっかり整えられ、建物、教育理念には工夫が込められていた。三木市もこれを参考に、より良いものをめざしてほしい。口の字型校舎の真ん中にある「つながりのにわ」等のネーミングが素晴らしかった。部活動が選べるほどたくさんあるのも良い。子ども達が喜んで通っていることが想像できる。

東条西小は50人程度であったが、2小1中を1つにし、小規模校から大規模校になり、児童・保護者の方には不安があったと思われる。きっと今回のように、丁寧な説明があり、丁寧に迎えていただいたのだろう。またこういう機会を設けていただき、いろいろな知恵をいただきたい。

(委員長)

当然、保護者、地域の方には不安はあると考えられる。私たちはそれを受け止め、向き合い、説明をしていく。そのためにここで議論していくことが必要である。

4-3-2制は、リーダーになる機会が1.5倍になる。4年生リーダーの出現はそのような区切りから生まれてくるもので、大きな可能性がある。6年生のリーダーになるチャンスが減るわけではないと考える。

三木市の学校統合の中でも言われている事だと思うが、子どもの数が少なくなると、どうしても教師が子どもに手をかけすぎて、子どもが受け身になってしまうことが考えられる。私達が思う以上に、子ども達の適応は早く、子ども達は日々とても成長している。これを丁寧に説明する必要があるだろう。

(委員)

施設の充実に驚いた。

図書室での、本の冊数やレイアウト、シンボルツリーが見える環境が素晴らしい。聖地(シンボル)的な施設になっていた。

「つながりのにわ」では学年の枠を超えた魅力ある行事が展開できると思う。統合した3校の歴史が分かるメモリアルな展示スペース、屋上のプールも良かった。

廊下側の普通学級には透明なガラス、特別支援学級にはすりガラスの工夫が見られた。

保健室の位置も校門の近くで、学校に来にくい児童生徒が遅れて入りやすく、疾病者の保護者への対応がしやすい配慮がなされていた。

教育相談室は入口が目立たないが、生徒が入りやすい仕掛けでもあるだろう。生徒用トイレが使いやすい、清潔でとても良い。大便を我慢しないようになる。

全国の小中一貫校の良いところを精選してつくられている施設だと感じた。

(委員長)

1年生から9年生の子が使う施設であれば、小中一貫教育の本質とユニバーサルデザインとは合致するのだろう。

(副委員長)

最高に優れている校舎。口の字型の建物で外光も入っていた。学習環境、生活環境として明るさ・温かさが校舎全体から感じられ、よく配慮されている。

低学年のベランダでは、床材は転んでも痛くないように配慮されていた。学年の発達段階に応じて校舎が設計されていることは面白い。

一方、学校は掲示物が多いのにガムテープで貼ってある所があったので、三木市でつくるのであれば、掲示物スペースに壁面のコルク等の工夫があればと思った。

カリキュラムは4-3-2制をうまく使って計画的、意図的にされている。子ども達がどう学ぶのかを見学してみたい。

それなりの予算はかかるが、建設費を含め校舎にどういった機能をもたせるか、重要な視点である。

以前見学した学校では、大人の図書も入れ、図書室が地域との共有スペースになっており、体育館等は夜に社会体育で使えるように開放していた。市民サービスの向上にもつながるのでそのような工夫を通して建設費を捻出したという話を聞いた。

三木市は後発の自治体になるので、学校教育だけではなく社会教育施設とし

での機能も取り入れる工夫等、先進校の工夫を参考にし、子ども達と市民の教育や地域の機能強化をより図ることのできる施設となることを願う。

(委員長)

社会教育との連携・融合は非常に大事な観点である。全国的には地域との連携スペースを1階部分に作り、鍵の管理までを地域に任せるところもある。市民サービスの向上にもなる。

大人が学んでいる姿を見せる。地域の大人と小・中学生、教員がつながり、地域ぐるみで9年間見守っていくという部分が小中一貫教育の理念になるのではないか。

三木市の将来像に話が踏み入っており、小中一貫校へ移行するのが前提のような、具体的な注文がいくつか出てきた。小・中学校を別々の建物でも小中一貫教育をできなくはないが、同じ建物で一緒に行くことに意味があるので、施設一体型の小中一貫校への方向性で考えていくということによいか。

(委員)

意義なし

(2) 三木市の将来像

(委員長)

次に、具体的にどんな形で三木市全体として構想していくのか、どのようなまとまりで学校をまとめていけばよいのか、どこからまず進めていくことが可能なのか等について、ご意見いただきたい。

(委員)

現在、小中一貫教育を各中学校区で推進している。各中学校区を単位としてこれまで培ってきた取組を活かしながら、小学校と中学校が一緒になるということを探っている。

これを新しい単位(校区)に編成し直し、進めるというのは難しいと考える。

視察時に通学が気になるという話があった。特に小さい学年の子ども達の通学を考えると、その意味でも、現行の6校区を単位として進めていくのが現実的であると思う。

(委員長)

かつては別のまとまりも考えていたが、現行の中学校区で進めてはどうか、

という意見であった。中学校区単位であれば地域との結びつきもある。意見によっては三木市の校区をもう一度割りなおすというのものもある。今の意見では、現行の中学校区単位で積み上げたものを大事にしながら進むということであった。

(委員)

教育センターの専門研修講座の中で、小中分離型の先進校の校長先生の話聞く研修会があった。近隣市で5－4制の小中一貫教育を行っていた。

別所小・中学校は、小中連携教育の時期から、職員の交流を積極的に行ってきた。そのつながりがあるので、別所地区では5－4制であればできるという感覚であったが、施設一体型の小中一貫教育の本当のメリットをみると、離れている中では難しいと感じた。

また、中学校の6校区でとなると、1つの小学校から2つの中学校に進学する学校の課題がある。

(委員長)

今後の再編時には向き合わなければならない課題である。

(委員)

今日の視察はハード面の中に込められたソフト面を感じる事ができた。特に職員室が1つであることが良いということであった。

現段階の離れていても進めていく小中一貫教育のソフト面の内容の充実は大切であるととらえている。本年度別所、吉川の2地区は実践推進校の指定を受けており、学校ではソフト面の中身を大切に進めている。

実践推進校の指定を受けたことで、地域の人からは「どこに施設ができるのか」ということが話題となっている。施設一体型の新しく機能的な施設は、9年間の学びや成長を支えていく説得力があり、未来を担う子どもを育てていくぞという気になる。

しかし、支えになるのは、具体の教育内容をどう進めていくかである。文化の違う小学校と中学校の教職員が、ともに子どもの育ちを支えていく視点が大切だと考える。

(委員)

小中で合同運動会を計画したが、地域の保護者からも意見をいただき、先送

りすることとした。今年度は、中学校の運動場を会場とし、小学校と中学校の運動会を同日、午前と午後とで分けて行う予定である。

保護者の方には、行事を一緒にすることが目的ではなく、その前後にある子ども達同士、教職員同士が交流することこそ大切であるとお伝えした。合同開催はしないが、交流は行うので、その取組の感想を子ども達から保護者に伝えてほしいと思っている。そして少しずつ広めていきたい。

2学期には中学生が行う予定であった情報モラルの学習を、6年生とともに行い、交流を図る。児童生徒はすぐに仲良くなれるが、それができないのは教職員の方かも知れない。先進校でも、大変なのは事前の小中の交流や会議の打ち合わせだということであった。

子どものことを考えても、クラス替えができるような規模が理想である。現在の校区では施設一体型の小中一貫校となっても、人数が少なく、クラス替えができない状況であり、現場では苦しい。この点で、中学校区での実施は現実的だが、現状では難しいこともあると思う。

(委員長)

吉川は争点となるであろう。保護者や地域の方におかれては、ご不安もあるだろうが、小中一貫教育で成長した子どもの姿を見てもらい、おわかりいただけるような形が望まれる。施設一体型だともっと花開く感じがあるということを実感してもらうことが必要になってくる。成果を見せていただき、共有していく。そういう事以外に不安を軽減していくのは難しいのではないか。

こちらも意を尽くして議論し、それをしっかり説明すること。不安をきっちり受け止めながら議論していくことが大切である。

現在、6中学校区で実践を進めているが、クラス替え問題の解決は難しい。今後考える必要のある課題だ。

数は独り歩きするので、学校数等については、中身をしっかり話し合っていく。答申ではなく意見の集約を伝える会議である。

6中学校区で蓄積をしっかりと活かして無理のない形で始める。その中でクラス替え問題や、進学先が2つの中学校へ分かれてしまう問題等を、どうしていくのかという課題である。

数ばかりに拘る必要はないであろう。中身を伴った結果として、数が出てく

るものである。よって中身を優先していきたい。一方で具体的な数の見通し、6校ないし5校のあたりを次回つめていければ、先ほど施設の感想の中で出てきた理想や希望につながっていくと考える。以上まとめとする。一度事務局へお返しする。

### 3 事務局より

(事務局)

資料2については、前回(第2回)の協議会でいただいたご意見を短い言葉で「つきたい力」にまとめた。ニュアンスが異なるようなら部分があれば、次回までに意見をいただきたい。

(委員長)

小中一貫教育でつきたい力というのは、今の学校と変わらないのではと考えていた。視察する中で、違いや小中一貫教育ならではのところがあると感じた。

### 4 閉会 副委員長あいさつ

(副委員長)

今回視察に行った加東市も参考に、三木市においてもきっちり準備していけば良いと考える。その議論の前提になるのがこの協議会である。次回以降も皆様と協議しながら三木市にそった小中一貫のデザインを創っていきたい。